

これまでの学びの蓄積を“条件的知識”へ深化させ、相手意識を育む

今回の学力向上検討委員会の公開授業は、高遠中学校にお伺いしました。

単に「話す」のではなく、相手に届くように「伝える」ことの本質を追究する授業です。

生徒が自分の「好きなこと」を、これまでに蓄積してきた「表現のワザの書」を駆使していかに魅力的に構成するか。

授業者には、AIを「答えを出す道具」ではなく、思考を深め、試行錯誤を支える「伴走者」として位置づけたいという願いがあります。

生徒一人ひとりが自分の内面と向き合い、納得のいく言葉を紡ぎ出すプロセスの実現を目指しています。



「テーマは決まったけど話題が決まらなかったから、あゆむ1号に相談したら、話題がポンポン出てきた。AIの力は、本当にすごい！」



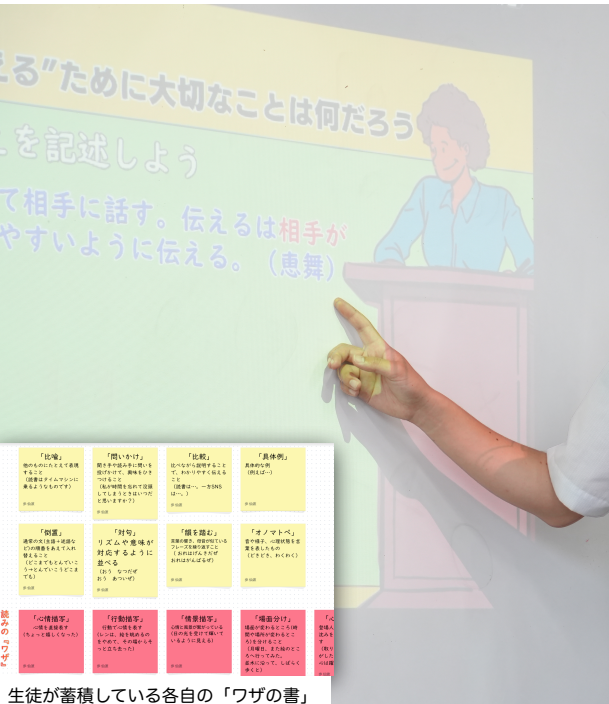
「文章をどうするか、みんなが楽しめるような原稿にしたい」と、相手を意識した主体的な学びの変化が見られました。

授業は「マッピング」から始まります。思考が止まった生徒は、対話型のAI「あゆむ先生1号」に相談し、テーマを絞り込みます。

次に「ワザの書」にある表現技法（問いかけ等）を用いて原稿を作成。

ここで「あゆむ先生2号」が画像認識を活用し、選んだワザをどう原稿に組み込むか具体的にアドバイスします。

生徒はCanva等のデジタルツールを自在に使い分け、個別最適なペースでスピーチを完成させていきます。



生徒が蓄積している各自の「ワザの書」

授業研究会（学力向上検討委員会）

授業研究会では、GeminiのGem機能を用いた「あゆむ先生」が生徒の学びをどう変えたかという点に最も熱い視線が注がれました。

特に注目されたのは、生徒の高い集中力と心理的障壁の低下です。

参加者からは「1人1人が自分の課題に対して没入感がある」との驚きや、「質問をするという行為のハードルの高い子に対する支援として有効である」といった、個別最適な支援への評価が相次ぎました。

普段は教師に相談しにくい生徒がAI相手に思考を言語化する姿は、大きな教育的成果として共有されました。

また、Gemへの設定（プロンプト）に関する授業者の工夫についても大きな話題となりました。

「AIに答えを言わせないという設定をして、トライアンドエラーできるような設定ができる」点や、画像認識を活用したアドバイスに「画像の中の文章を読み取り、分析や助言に自動的につなげられるなんて、面白いですね」と感心の声が上がりました。

AIを単なる回答ツールではなく、思考を促す「伴走者」として機能させた設計が評価の焦点となりました。

一方で、さらなる思考の深化に向けた議論も行われ、「マッピングを深い思考につなげていくためには、何かもうワンクッションの工夫があったのでは」という課題も示されました。

最後には「早速使おうかな」と、自身の授業への導入に意欲を燃やす先生方の姿が見られ、AI活用の可能性を強く印象付ける研究会となりました。

「Gem（カスタムチャット機能）」

授業者がGem（あゆむ先生）の設定で工夫した点は、生徒の主体的な思考を妨げず、学習を円滑に進めるための教育的配慮に集約されます。

まず、AIが安易に答えを教えたり原稿を代筆したりせず、問いかけを通じて生徒自身の「試行錯誤（トライアンドエラー）」を引き出すよう設定しました。

また、AIの返答が長すぎると生徒の読む負担になるため、短く簡潔にレスポンスを返すよう指示しています。

さらに、画像認識機能を活用し、生徒が選んだ「ワザの書」を読み取って具体的な表現のアドバイスができるよう工夫しました。

役割を「親身になって生徒を支援する先生」にすることで、教師に質問しにくい生徒も気兼ねなく対話できるよう心理的障壁を下げています。

授業の指導案はTeams「InaWaku2026授業づくり」参照

高遠中学校 仙波 歩先生の授業と研究会の様子をもとに推進センターでまとめさせていただきました

伊那市学校教育情報化ビジョン2024

探究的な学び

先進的な学び

個別最適な学び

協働的な学び

自立的な学び

子どもと共に未来を創る教員